

The only full-color newspaper in Japan

東海新報

つぎのつぎ

東日本大震災と住田の心

今の暮らしに価値があるから

区は学びの環境として再び息づき始めた。

岩手県立大生らが中心となつたグループは、平成28年5月ごろから復興支援の想を抱き、地元として同公民館を利用。今年も同地区を拠点とする学習プログラムが組まれ、学生が訪れる。

筑市部やキャンパス内にはない気づきを得る。山里に根付く住民文化の奥深さを意識化が進む地域課題の現実にあれ、これからは何が出来るかを考える。自身の成長につながるから、よだえることなく黙

住田町上住の五葉地区は、気仙台からみると北側に位置し、遼鮮、釜石の両市境に近い。人口は約800人で、高齢化率は約60%を誇る。山あいにある同地区では、東日本大震災による直接被害はなかった。

しかし、当時住田町にいた地区内在住者が犠牲となったほか、震災直後には多くの住民が親戚や知人の安否を案じながら過ごした。本年度から五葉地区公民館長を務める藤井洋治さん(60)は、7年6カ月間からの日々を、こう振り返る。

「五葉では確かに、震災によって建物が潰され、偏れる

ことはなかった。しかし、さまざまな事情から家庭で引越さなければならず、子どもたちも転校する友達を見送るなどして、複雑な感情を抱いていたと思う」

五葉地区公民館が構える地にはかつて、五葉小学校、五葉中学校があった。洋治さんは公民館が新築整備される前、おもむきある木造の小学校舎を活用し、地域の活性化につなげられないかと思い、遊ばせていた一人だった。同地区でも震災を機に、五葉地

学びの場を地域に



今日28日に上野住八日町通りで行われた五葉小学校40周年祭でも、同大生たちが立ち上げたNPO法人いわてGINGAIN E.T.(八重樫親子代表、盛岡市)の呼びかけで学生ボランティアが訪れた。震災を機に新たなつながりが生まれ、住田の宿

れているとみえる。

五葉地区には今年、古民家を生かした「文化政策・まちづくり学校」が生まれた。洋治さんらは昨年、現在学長を務める池上博幸和大学名誉教授と手を組み、地道に環境整備を進めてきた。

4月8日に行われた入校式で、同地区は、7人が入校。気仙台にとどまらず、筑市部や東京府、徳島県、京都府など県外在住者も含まれ、年代も30、40代と幅広い。

教育委員の洋治さんに「私を手づかみでやる気仙川の歴史で、世界最先端の文化資本経営学を学びたい」とを述べる。講義をはじめとした体験学習に加え、震災復興や防災、福祉、建築、教育文化など幅広い領域をそろえ、多様な学習機会を創出している。

五葉の地に学びの環境をつくりたいとの思いから構築を始め、数年で実業に生徒が入校するまでに至った。学習施設のある公民館で行われた文化政策・まちづくり学校の入校式。上野住

(日曜日掲載)